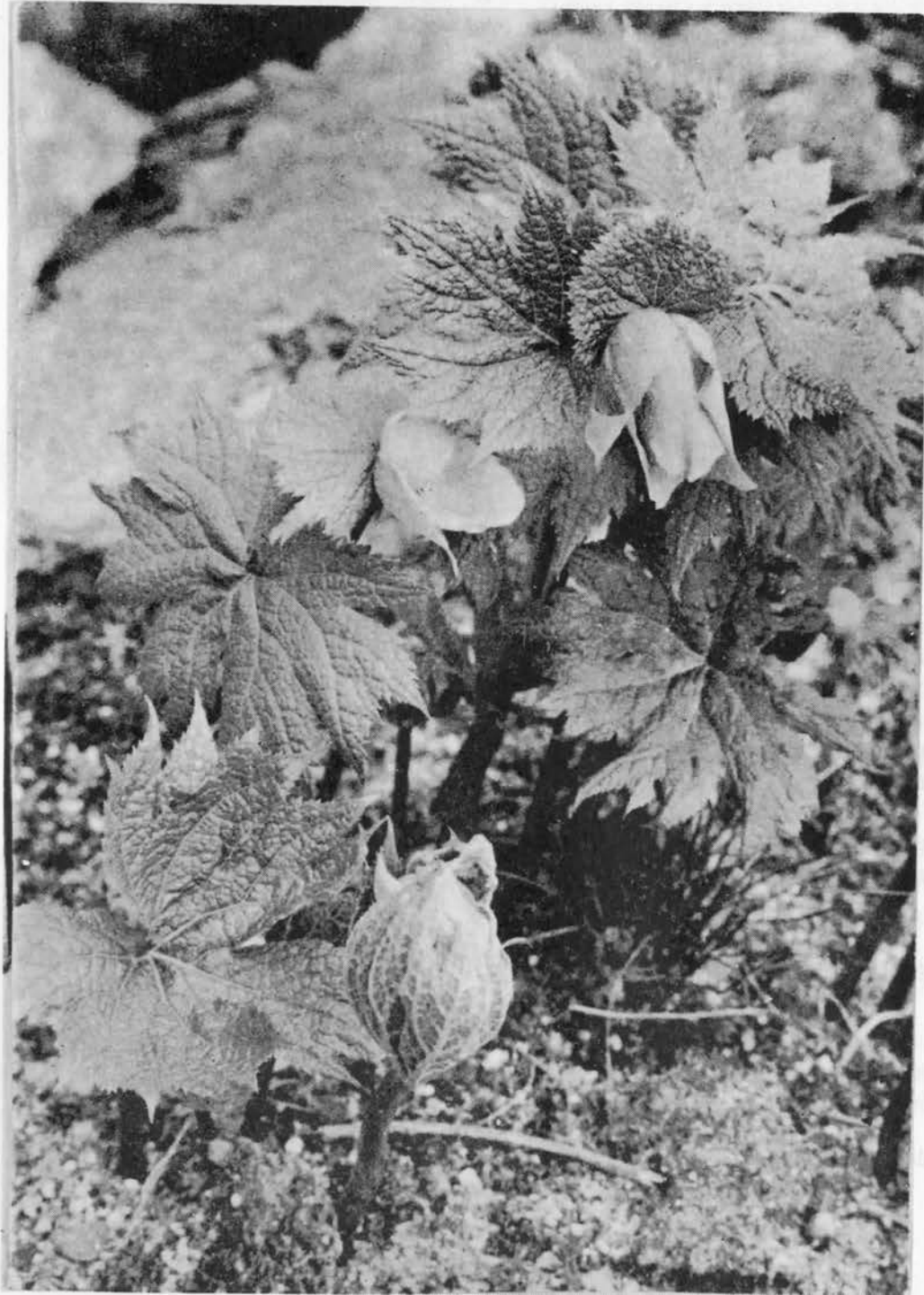


山と博物館

第4巻 第4号 1959年4月20日 大町山岳博物館



シ
ラ
ネ
ア
オ
イ

紫色の大型な美花を開くシラネアオイは、日光白根山などに多く生育しており、花の形がアオイの類にしているためそのような名前がつけられた。私達が花びらと見ている紫色の部分は実は、花びらではなく、ガク片の発達したものである。

針ノ木峠に関する資料

高橋秀男

④元禄11年6月

大町村庄屋 栗林五郎右衛門の絵図「信州安曇郡内大町組」に針ノ木峠について「是ヨリ北ハ通路無之故知不申候」とある。

⑤安永2年

吉沢好謙撰「信濃地名考」(三巻)巻頭の「科野之国形」に穂高嶽、五六嶽の名がでており、中篇、安曇野の項では「高瀬川は五六嶽にいつ、又北の方野々入の水に会う此辺を□□越と云い、天正年中越中の佐々氏愛に至るによりて佐々越ともいふとぞ、越中の芦倉へ百余里今通路なし」とある。

⑥文化11年11月 新川郡御縮山之図

針ノ木岳の名を記載

【註】ただし峠の南の山であるので今の不動岳だと思われる。(杏文庫蔵)

⑦三州測量図籍 石黒信由作

文政2年着手、文政7年完成、天保6年浄書完成
(高樹会所蔵)

⑧文政5年7月

石黒信由：諸郡道程調理方絵図張面等当用覚帳
一、立山後御縮山舟見村太郎右衛門と相談いたし下絵図相調可申事

⑨文政5年9月

石黒信由：新川郡立山之後御縮山分間絵図
但舟見村太郎右衛門方に於テ図之
但又御縮山所々に於テ太郎右衛門等視申方角野帳面は道程しらべオ野帳之内へ入第十六と名付け別に有之候
(中島正文：黒部奥山と奥山廻り役)

⑩文政4年 戸出村義兵衛請負を以て杉槻五葉松はだ等を信州の方へ伐出す。

(中島正文：黒部里山と奥山廻り役)

⑪嘉永2年 佐伯有次郎手記

上奥山御境目廻御用方控写留帳

針ノ木峠ニ而廻り書札相立申候ニ付書様之撮合左ニ記申候

表 加州境目見分

水谷 吉太夫
杉原三左衛門
佐伯 有次郎
伊藤 刑部
杉頭 二十人
平杣 二百人

裏 嘉永二乙酉年六月廿一日

同年の日記中に

一、同(6月)廿日。曇天。前日の疲れにて、漸々辰の刻頃三吉小屋出立、クツレの難上を通り、南又へ下り候処近年の地震にて追々山崩れ有之、何れも難儀。にて罷下り、程よき処にて昼食致し、先づ先づ無難にて未の刻頃針ノ木谷の口南又の出合の小屋場へ着野宿。

但、此日道程四里斗りの事。

一、同廿一日。雨天。右針ノ木谷小屋出立、自分並沢田公御横目松原伊三左衛門殿、三人にて杣人足六人召連れ針ノ木峠へ、其外針ノ木谷東谷東又谷通り難成る山岸罷登り峠へ至り候処、甚だ早き立平の草付にて、誠に大事に相構罷登り、弥々峯御境目へ至り書札差立、先づ其所にて暫く一休致し、夫より又段々罷下り、右針ノ木谷側の小屋場へ着一休仕、又其所罷立下り黒部真川を杣共に背負渉り、上り候所、御横目水谷吉太夫殿齊木公儀は夫々小屋懸け為抄結構に出来有之候。且又此日御横目方御兩人共酒に御招申候事。尤此日針ノ木峠へは水谷吉太夫殿齊木公は御越無御座候事也。

但、此日道程七里斗。

⑫嘉永3年11月

飯島家より針ノ木峠新道開設に関する願出

口上書

一、信州安曇郡野口村より越中新川郡足倉御姥尊橋迄嶽越道法(ノリ)凡拾壹里式拾壹丁余右新道筋御聞届ケ之御免ニ相成候得ハ当御領分ハ不及申上諸方御上下之御為筋上奉存候尤得易シ所大数記ニ記

一、越後糸魚川より信州大町并松本城下迄入荷数、塩凡四万俵余、綿布荷凡式万五千箇余、香、笠、輪類、富山薬種荷、諸荷物等凡式万五千箇余

駄大数四万五千駄余

駄賃下ケ老駄ニ付老奴五厘安、糸魚川より大町迄

此銀六拾七貫五百目

為金千百貳拾五両余

是ヲ年内割四月ヨリ十月迄七ヶ月往来六百五拾六兩余国易ニ相成申候

一、御家中様方御通行出来筋ハ難所親不知并丹波嶋舟渡矢代舟渡シ三ヶ所之難場相抜ケ申候

右之通大数書認奉懸御目候上ハ蒙御見分道筋伐広メ申度幾重ニ茂奉願上候以上

嘉永三成年十一月

松本領信州安曇郡野口村
目論見人 善右衛門 印
同 断 源十郎 印

「山と博物館」を毎号ありがとうございます。いつも面白いしかも有益な内容で敬服しております。

ところで今月の「針ノ木峠に関する資料」ですが、これは資料ですので異論をさしはさむ余地はありませんが、「②の佐々成政雪中佐良越」の件については一度調べたことがありますので、小生の意見を申しのべさせていただきます。

甫庵の「太閤記」はあまり信用のできる書物ではありませんが、天正十三年のいわゆる雪中さらさら越しのことはまああったことだろうと思います。

前後を前田と上杉におさえられているので徳川と連絡するためにはどうしても信州に出て甲州——駿河のコースをとるよりほかはないのですから立山——黒部——針ノ木のコースを辿らざるを得ません。針ノ木か野口五郎か信州へ出る最後のルートはよく分

りませんが、まあ針ノ木としておきましょう。

「太閤記」には富山——浜松間を上下二十日で往復しようとしており、十一月二十三日に富山を立ち十二月一日に上諏訪へ出、同四日に浜松についています。これはデタラメです。当時諏訪から甲府へ出るのに六日はかかりさらに甲府から浜松へ出るのに十日はかかりましょう。家康は駿府(静岡)まで乗馬五十足、伝馬百足を迎えとして出したと云いますが「家忠日記」には「十二月二十五日印丁越中佐々内蔵介浜松へこし候」とあります。これが正しいでしょう。このとき信雄は岡崎附近で鷹狩りをしてをり成政は吉良で面会しているようです(「当役記」の記事によれば)ともに秀吉を討とうというのですがケンカすぎての棒ちぎりで成政の

策動は成功せず望みを失って越中に帰っています。住路をひきかへしたわけです「越登賀三州志」の七月説は当時の立山を知らないといってもよい程度の説で積雪期以外立山東面へ踏み入ることは立山信徒のおきてとして許されていなかったのですから、立山は芦くらへ下るコース以外は抜詣りとして罰せられていた筈です。獵師も積雪期でなければこの方面で獵をすることはできません。彼等はこのころすでにスノーホールを活用し熊を追って極地法的な山登りをしていたらしくしたかつて冬期なら信州へぬけた経験の持主もあつた筈です。ガイドは何人もいたでしょう。立山東面の内蔵の助平を成政にむすびつける説もありますが、スケというのは黒部の方言らしく、スケザワ、スケダンなどの訳名を昨夏第四ダム工事の人から耳にしています。クラは岩で立山東面の岩場でしょう。クラのあるスケ

針ノ木峠に関して

高須さんからの手紙

の意が内蔵之助で成政に関係ないと思います。これは宛字です——例の黒部の埋蔵金伝説の真相についてはかつて「岳人」に書いたことがあります。

黒百合伝説をあつかった直木賞の小説「お吟様」(今東光氏)はいかに小説といふながら天正十六年に死んでいる成政が十八年の小田原征伐の際、大阪城で留守をしていた北の政所のごきげんうかがいに出るといふデタラメを書いており、興ざめがしました。黒百合を文字通りブラッククリイにしているのはまあ仕方がないとしても

以上筆の走るままに 乱文ご判読下さい。

四月二日

高須 茂

(中島正文：峠の古文書)

明治9年6月

本村より西に入、籠川に添ひ、越中の国へ通ずる山路あり、此路を開かんと天保年中の頃より、野口耕地飯島善造の親善右衛門なる者、開路の見込を立、旧御領主並加州御領主へ出願に及と雖も、其頃新道の許可なく空しく成居るを、右飯島善造親、年来の魂望を報ぜんと思慮する事久し然るに御維新の時節に至り、右善造並有志の者四五名申合せ出願致し、昨年11月許可を得る。此上は漸時新道開くべきなり、是迄北越運送は越後糸魚川へ通り越中の国より当村に至る。里程四十四、五里の通行なるを、此新道開修成功の上は、越中国新川郡へ当村より里程十八里にして通行す。四十四里の間にて二十六里の道路を減ず、運輸賃金は勿論、旅行の庶人助成少なからず

里全御時政の御恵と諸人の程大ひなり右之通当村地誌取調奉差上候以上。

明治9年6月

右村 副戸長 新井忠三郎 傘木三吾 海川次郎 飯島善造 福島権八

筑摩県参事高木惟矩殿

(長野県町村誌 南信篇)

明治9年6月16日

本県下松本より加州金沢までの通路が新たに安曇郡野口より開きなるとの事有升、是出来たなら便利で有ましよう。従前通路は越後糸魚川へ出て里程凡九十余里も有所、野口の新道は五十里程だと申升

山国の春は先ず川辺と清水端から始まる。まだあたりは丈余の雪に堆れているのに、それを知っている子供達は学期末の休となれば此處で連日水遊びに余念がない。フキノトウ、フクジュソウ、ザゼンソウ、オオイヌノフグリ等が咲くこの土手はまた水藻の香りがあたり一面鼻をつく。

小石を掘るスナヤツメ

この頃、湧水の小川の石まじりの流れや池では、普段あまり見かけないドジョウのような魚が群をなして石を掘っているのをみる。スナヤツメである。スナヤツメは北日本の魚で、日本海に注ぐ川の上流に棲み、外国にはいない上に魚の仲間では原始的な魚である。両側に七対の鰓孔があり、眼はほとんどみえなく、体長10数㎝、口 ※



※ は吸盤状で吸いつく性質を持っている。雪融の頃に数十四群集し小石を掘つて産卵する。

春の川辺に

動物二題



写真①は産卵に集つたスナヤツメの群集、姫川上流神城地籍にて写す水中30センチ

抱接するヤマアカガエル

去年の10月より8ヶ月におよぶ冬眠に別れをつけたヤマアカガエルは雪消と同時に産卵する夕暮をまて隠家をでたカエルたちは相手を求め愛行動を起す。可れんな鳴声とやさしい眼をしたこの冷血動物にも愛の争奪戦がある。人間の仲間と逆の一妻多夫がカエル仲間では普通の現象である。

写真②1956,4,12白馬山麓にて午後11時50分小雨マグネシウム使用 f 8開放 (長沢武)

蘚類の見分け

学芸員 平林昭一郎

(2) ミズゴケ科の蘚類

わが国は世界一ミズゴケ類の種類が多く、特に尾瀬湿原に約20種類、霧ヶ峰湿原には約10種類知られており、1カ所にこれほど多く産することは世界でも非常に珍しいとされている。

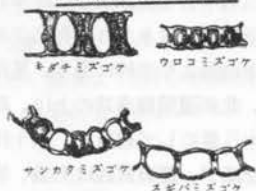
まず大町地方でもっとも簡単に採集できるオオミズゴケ(ミズゴケ類中もっとも普通なものであるが、場所によっては採集するに困難である)をとり、枝葉の横断面をつくり顕微鏡でみると(葉の内面が表で外面が裏になる)細胞は1層で緑色細胞(葉緑細胞ともいわれ小形で葉緑体を含む)が楕形にみえる。透明細胞(貯水細胞ともい

われ大形で無色透明水分のみ含む)は表裏面とも突出しており、裏面の方がより強くそり返っている。ところどころ孔の断面及び細胞膜の厚い部分が環状の膜としてみられる。葉の横断面の形はミズゴケ類の種類を見分けるうえの大切な区別点になる(引用図書「日本の蘚類」「生物学実験法講座蘚苔類」)

オオミズゴケ (堀川氏原図)



各種類の枝葉の横断面



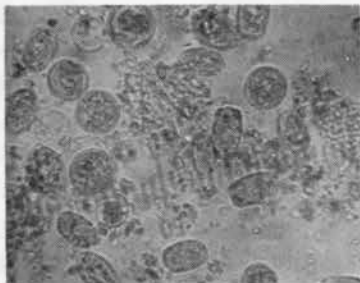
雪を
彩る

冰雪植物について 2

長野県白馬高等学校教諭 小野 貞雄

③赤褐～緑褐色：

同じ赤褐色の赤雪でも、ブナ（雨飾、猿倉、白馬尻）、オオシラビソ、コメツガ（榊池）、の林地内に発生するものでは第9図の如く、Chl-



第9図 ツガ、ブナ林内に発生する赤褐色雪

amydomonas nivalis が主要構成種で、Scotiella nivalis を多く含み、Oocystis cacustris f. nivalis や動物質、有機質も見出されております。緑褐色雪は、上記の森林の間から太陽光線の当る雪溪に見られ、Chlamydomonas nivalis と Oocystis lacustris f. nivalis が主要構成種で、Scotiella nivalis を多数含んでいる場合と、この三種が主要構成種となっている場合があります。そして両者ともに、ヘマトクロームを欠き緑色を呈した Chlamydomonas nivalis (第11, 20図) も含まれており、僅かではあり

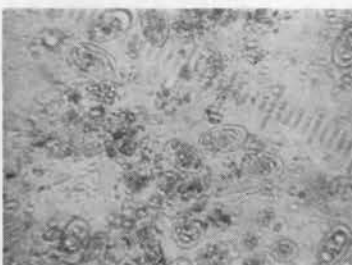
ますが、Chionaster nivalis 及び珪藻や、有機物が見出されています。

④緑色～暗緑色

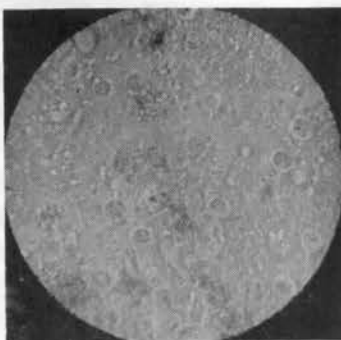
：森林内に発生

するこの緑色系の雪には、Oocystis lacustris

f. nivalis が主要構成種で、これに僅かの Scotiella nivalis と、Chlamydomonas nivalis に、有機物を含んだもの、及び Oocystis Lacustris f. niva-



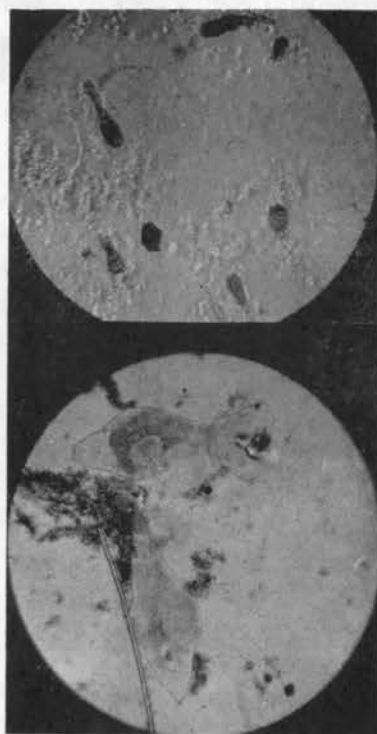
第10図 緑雪を構成するOocystis lacustris f. nivalis 黒色は有機物



第11図 緑雪を構成するChlamydomonas nivalis と Oocystis lacustris f. nivalis

valis (緑色) が主要素で、これに次いで Scotiella niv-

alis が見られ、Chlamydomonas nivalis (赤色) や、Chlamydomonas spp. を少量含んだものがあります。この外に僅かでありませんが、第5図の Chionaster nivalis や、Selenotila nivalis、珪藻類(第24図) 原生動物輪虫類(第12図)、それに第13図の如きカプトゴケ、テリハヨロイゴケ、モチゴケ、ヒメビンゴケ等の胞子と思われるものも見出されています。又、榊池産の緑雪の中には、極僅であります、Chobotella brevispina (第4, 17図) を含んでおります。Chobotella brevispina



第12図(上) 緑雪、暗緑雪より発見されたカプトゴケ、ヨロイカプトゴケ?の胞子と思われるもの。第13図(下) 同原生動物

は、今迄長野県からは発見されておらず尾瀬地方や、八甲田山地方では、本種が主要構成種を成している緑雪があり、又赤雪にも見出されています。このように構成する生物は地域により異なります。いづれにしてもこの系統の雪の色は、Oocystis lacustris f. nivalis のみか、又は Chlamydomonas nivalis (緑色) の両者が主要素の場合には、誰でも一見して判定出来るほど、葉緑素か何かの緑色素で雪を染めたかのように美しい鮮緑色を呈しております(第10, 11図)。これに有機物が含まれて来ますと、暗緑色を帯びます。有機物、原生動物、不完全胞子等が多数含有されますと、ほとんど黒色に近い暗緑色を呈します。

林地内に発生します赤褐～暗緑色雪の雪質はベタ雪に多く、円状に或は、斑点状に広範囲に渡って分布しております。(この項続く)

積雪期

白沢天狗尾根より爺岳へ

大町山の会 久保田 稔

隣に寝ていた柳沢さんにつまかれて眼を覚したのは午前2時10分だった。源波を昨夜出発して0時丁度に入天した武田武さん、菅沢君、古原先生みなぐっすり寝入っている。マナスル天の高橋さん、福島さん、北沢さんも又同じだろう。

気温は以外に高い。心配になって外に出てみた。風はない。しかし星はみえぬ。あまり好天気ではなさそうだ。早速雪を溶かして食事の準備にかゝる。ラジウスは本日も快調だ。これの勢い良く燃える時の音は何とも云えぬ気持の良いものだ。スープとパンの簡単な朝食が終ったのは四時半だった。

5時20分、完全装備に身を固めてテントを出る。東の空が真赤に燃えていた。しかし厚い雲が一面空を覆っている。高曇りという奴だ。

大町は漸く眠りからさめた頃であろうか。ポツンポツンとあかりが灯り始めた。気温プラス1度。(昨日はマイナス4度だった。)ツアツケが良く効いてピッチが上る。アノラックを着ているとジツトリと汗ばんでくる程の暖かさだ。約30分で白沢天狗に着く。昨日、一昨日とその姿を見せなかった爺ヶ岳が手に取る様に良く見える。足元には関電の事務所がその緑色の屋根を光らせていた。

昨日昼飯を食べて引返した地点に着いたのは6時半だった。昨日よりも1時間余り早い。スキーの出来そうな一寸した広場だ。厳寒期にやる場合には恰好の第二キャンプ場だろう。昨日のこの辺は猛烈な吹雪で気温は常にマイナス7度前後という悪コンディションで視界も殆どきかなかったが、本日は目指す爺が大きく聳え立っていた。雪尻に気をつけながらどんどん高度をかせいでいった。しかしさすがに疲労の色は覆いかくすべくもない。今朝は2時起床だ。昨日は4時、一昨日も4時だ。この上、昨日、一昨日の吹雪の中のアルパイトは相当体力を消耗していた。足は重く、むやみにのどが渇く。ところによっては新雪が1尺以上も積っている。そんな所を10米もラツセルをするとフラフラになる。腹の減ってきたのも大部こたえた。

8時15分、東尾根とのジャンクションに出る(2400米位か)。頂上は目前である。はるか南方には東洋のマッターホルン槍ヶ岳を中心に穂高連峰、笠ヶ岳、三俣連華岳、そして左に秀峰富士、噴煙なびく浅間山、更に戸隠高妻、妙高の山々…そして眼下に我等が故郷大町市が…我々はゆっくりと腹ごしらえをした。

8時30分、俺をトップに再び頂上に向った。1月に東

尾根からこの爺をアタックした際、一週間春山の如き好天に恵まれながら、我々がアタックするという最後の日に猛烈に吹雪かれて2200米の地点で引返しているだけに猛烈にファイトがわく。眠けも、疲労も、吹雪もものともせずに一歩一歩頂上をめざして進んだ。氷と化した雪上をアイゼンをきかせ、ピッケルでバランスをとりつつ、肩で大きく息をしつゝ、40分間一気に登りつめた。

9時10分、2670米の頂上に立つ。西方に、剣、立山の3000米級の峻剣が姿をあらわした。

「御苦労様!」「ありがとうございます」お互いに固い握手をかわし、肩をたたくき合せてその感激と喜びを分かちあった。

古原先生の8ミリが首を立てる。北沢さんのカメラがさかんにシャッターを切る。

熱い紅茶をすゝり、煙草に火をつけ、とう酔にふける事十数分、「槍にガスがかゝったぞ、天気がくづれるぞ」という古原リーダーの声で腰をあげる。

9時25分、名残りを惜しみつゝ、元氣よく下った。

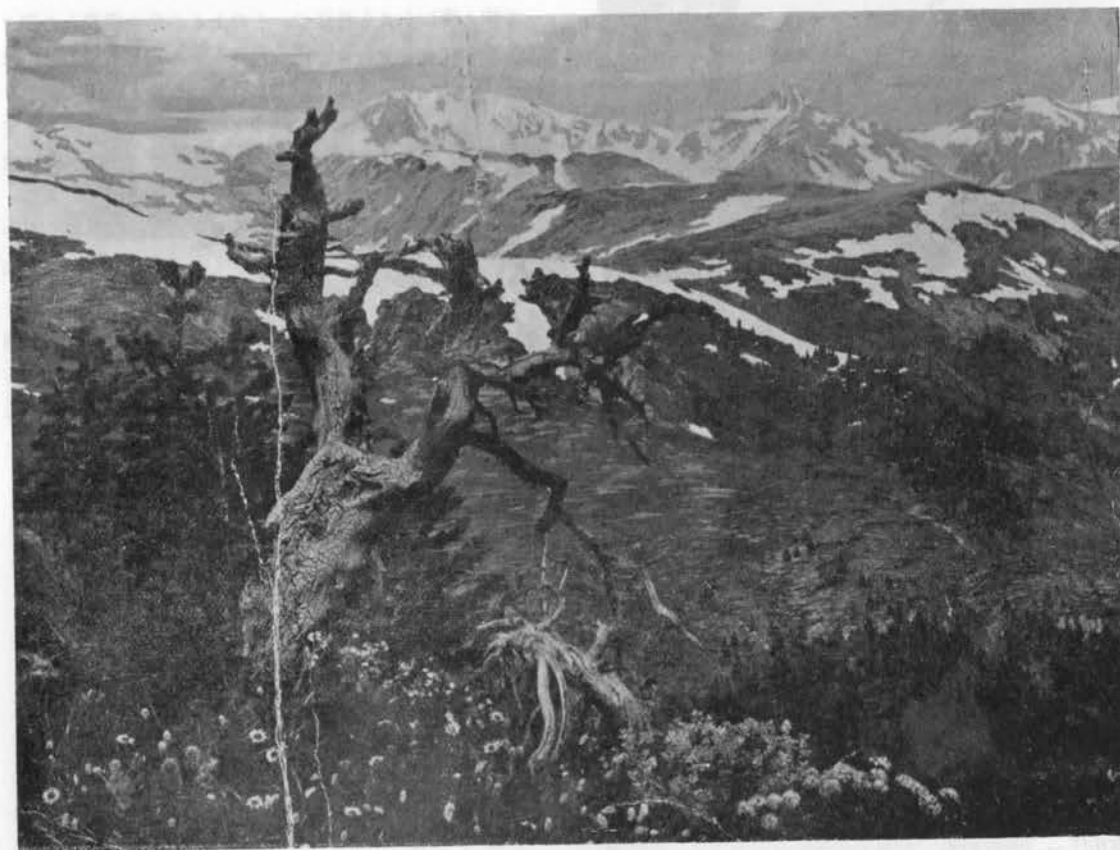
しかしその元氣もながくは続かなかつた。緊張の連続そして頂上征服の充実した満足感の後に来るホッとした安堵感、再び疲労感と空腹感を呼び覚めた。重い足を引きづる様にして無意識に足跡をたどった。

30分位の行動の後にとる休息が待ち遠しくさえあった。9時半白沢天狗着。振りかえれば爺は既にガスの中に没していた。そして我々の近辺にも小雪が舞い始めた。

12時丁度テントにかえる。猛烈な空腹感におそわれるのどの渇きもひどい。

食糧は米が6合ばかり、あとは漬物が少々あるのみ。武さんの提案でお茶漬けとする。腹一杯という訳にはいかなかったがそのうまかつた事……。再びもとの元氣な我々に戻った。2時半撤収を終えて下山。コースを矢沢にとって雪渓をグリセードで下る。デカイザツクを背負ってのグリセードは我々初心者には一寸きつかった。雪はいつしか雨となっていた。汗と雨で体中ぐっしょりだった。40分のグリセードと十数分の数こぎの後漸く源波に通ずる林道に出た。すっとんきょうな虫音をはりあげて山の歌をうたう我々の足は軽かった。

(註) 4月10~12日 大町山の会のリーダー講習会の紀行である。参加者8名、源波より白沢天狗尾根を経て爺岳をアタックしたものである。



◎…昨秋、国立自然教育次長鶴田総一郎氏は約半年にわたってアメリカ、ヨーロッパ各地の博物館施設の視察に旅立ちました。この絵葉書は1958年11月本館宛に下さった大変興味深い便りです。

どうです、すばらしい生態写真でしょう。と申し上げてもすぐには「そんなことねーさ」判別が付きかねるでしょう。これがデンバーの市立博物館の生態展示室のほんの一コマです。今迄あんまり感心したのがなかったというより日本でもやっている形式で得るところがなかったので、お便りする気にもなりませんでしたが、ここでウーンと一うなりしました。この絵はいい方ではなく、もっとすばらしいのがありました。写真を沢山と

りましたので帰国後おわけできると思います。プラスチックと緻細工と人工照明、それと絵かきが実にすばらしく実物はこれ以上に遠近感がでており、こちらがその中にとけこんでしまいそうな良さです。特別な秘法はないといっており、仕事部屋もつくりかけの展示も見せてもらいましたが、確かに特別変っていません。唯これだと思ったのは、生態展示の場合には本当にしっかりした生態学的基础調査の上に立ち、これをそのまま草の数一本まちがえずに（すこしおかげさですが）再現し、想像やごまかしが全然ないことです。えかきの方は、実物模型をつかってそれをみては描写し一つ一つ寸法を換算して正確にかいていました。具体的には帰ったらお話できると思います。

「針ノ木岳」予約を募る

度々本紙で紹介しました調査報告「針ノ木岳」はいよいよ5月10日に発行されることになりました。B5判160頁、アート写真10頁で600円（送料含む）1

000部限定版です。内容は第一部保護、第二部自然で針ノ木岳を総合的に調査したものを単行本としてまとめたものです。目下予約受付中ですので、希望者は至急博物館宛ハガキに氏名、住所、部数を記入の上申込んで下さい。



世に野暮な人のことを「掠鳥の様だ」という言葉があるくらいこの鳥は鳥仲間では地味で野暮くさい鳥ということになっている。どこからそんな汚名を頂戴するようになったかは知らないがこの鳥の姿は野暮くさくはない。黒褐色と白の体に橙黄色のくちばしと黄色の脚はどうし

映画「自然園の四季」(仮題)

美しい郷土の自然や生物の生態を描くとともに、貴重な数多くの観光資源を郷土の発展に活用し、さらにそれを保護、育成して行く思想を啓蒙しようとする映画「自然園の四季」(仮題)の製作が企画された。製作 大町市、企画 観光課、教育委員会、脚本 博物館、撮影 山本携拳、海川庄一、古原和美、調査には本館学芸員、その他山岳団体の協力を得て本年1年間にわたって撮影が行われる

館庭に山岳展望解説板を設置

北アルプスの北は白馬乗鞍より南は鍋冠山までの一大展望をほしいままにできる館園内に新しく、これらの名前が一目でわかる解説板が設置されることになった。すでに白馬岳や乗鞍岳などに知られるものと同様、銅板に山岳を掘り込み、それに解説を加えたもので、扇型に自然石をとき出し、高さ1m、巾1mの大きさのものである。

春の植樹

園内を緑一色で包もうと婦人会や鹿島部落などの協力によって、第1期植樹作業が行われた。婦人会からは延130人に及ぶ労力奉仕と苗木カツラ、アズサなど62本(20,000円)の寄贈をうけ、4月11、12の両日植樹が行われた

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

て仲々美しくよく目立つ。その上この鳥の農業上の働きは重大なものである。稲の大害虫であるメイ虫の幼虫は稲株に潜んで越冬するのであるが、このことを人間よりもずっと以前から知っていてその駆除に大きな働きをしていたし、そのほか田畑の害虫を駆除することにかけては他の鳥に決して劣らない。

4~5月頃木の洞穴や建物の屋根や間隙を利用して4~

ムクドリ

9個の緑青色

長沢修介

の美しい卵を産む。蕃殖期

以外は群棲することが多く特に秋から春迄は大群で生活し神社の大きな木、竹藪、森などをねぐらとし朝採食地に出発する前、夕暮帰ってきた時は互に喧しく鳴き合い騒然たるありさまである。

(写真はムクドリとその巣穴)

又長野県より皇太子殿下ご成婚記念用としてウラジロモミ、ヒノキなど213本鹿島部落からはシラカバ、シヤクナゲ、コメツガ、クロベなど268本(トラック1台)を区有林よりもらい受け、園内にはシラカバ林、シヤクナゲの群落ができた。その他旧館よりの移植、ヤマツツジの列植、観光課よりサクラの植込みがあつて植樹作業を終った。

「博物館友の会」結成へ

会員も募集中

博物館でこん日まで行われてきた種々の普及活動を本年度から組織立てて継続的に行うことを目標に「博物館友の会」を結成し、山岳博物館を中心に学習活動を進めることになった。この会は小学生4年以上一般までの同好者で組織され、会費は小、中学生月額5円、その他の会員は月額10円で、会員になると館事業の優占的参加、博物館の無料観覧ができることになっている。自然に親しみ、郷土を知ること、創意を生かし技術を高めることなどを主眼に野外教室、科学学級、自然に親しむ活動、染色工芸講習、星をみる会、登山、農村社会の研究、園芸実習などの事業を行う。なお、申込みは山岳博物館で受けている。

山と博物館 第4巻第4号 1959年4月20日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)211

大町山岳博物館

印刷所 大町市上中町

信州印刷大町工場